L1J/L1

本科１期６月度

解答

Ｚ会東大進学教室

高１東大国語

高１東大・京大国語

8章

【問題】（演習）

出典…宮岡伯人『滅びゆく言語』／上智大学・改

文章略解

言語による環境の範疇化および範疇を操作する様式には多様性があり、それが人間の発想の豊かさを保証し、個々の言語をユニークなものとしている。混沌とした環境を範疇化することで、はじめて環境への適切な適応行動がとれる。範疇のそれぞれには、価値観や意味づけなどが結びついている。この意味において、言語には「文化がこめられている」と言え、「異文化コミュニケーション」とは、「言語にこめられた文化」の相互理解でなければならない。文化の中核には言語がある。それぞれに固有の文化がこめられている言語が次々と消滅していくことは、言語的あるいは文化的多様性の縮小なのであり、人類の知的発想の豊かさと知的世界のヴァイタリティを削ぐことである。

解答

問1 (ア)＝織　(イ)＝呪術　(ウ)＝中核　(エ)＝消滅　**問2** (d)

問3 人間は、自然のままの環境を言語で整理し分類することではじめて、それに適応した固有の行動様式を選択できるということ。〔57字・解答例〕

問4 (d)　**問5** (a)＝A　(b)＝B　(c)＝A　(d)＝B

【問題】（自習）

出典…日高敏隆『エソロジーはどういう学問か』／成城大学・改

文章略解

人間の攻撃性について語られる時、そこには人間の残忍性や人間に対する不信や絶望といったものよりも、人間の動物に対する優越感が大きく作用しているという、憂鬱な状況がある。動物行動学者のローレンツによるとこの攻撃性は、種を維持する上で不可欠的に必要なものである、ということだ。だから、全ての動物はこれを大切にし、その「いわゆる悪」の面をなくすことに真剣であった。しかし人間においては、本能の脱線と攻撃性抑制機構の停止という複雑な問題が、攻撃性の問題をやっかいなものにしている。

解答

問1　戦争〔解答例〕　**問2**　残忍性においてさえ人間は動物とは違うという優越感を抱くこと。〔解答例・30字〕

問3　①＝(ア)　②＝(ア)　③＝(ウ)　**問4**　個体間に何〔34行目〕

問5　殺合いや傷つけ合いをすること。〔解答例・15字〕　**問6**　最初……攻撃性は種　／　最後……要なものだ〔16行目〕

解説

問1　傍線部(a)は「人間の攻撃性、暴力性、殺人について意見を求められたとき」の答えであるので、これは「スローガンのために人間が行う攻撃（＝暴力、殺人）」と読み替えることができる。「スローガン」とは「ある団体、運動の主張を簡潔に表した標語」であるので、ここから人間＝複数（もっと言ってしまえば集団）と摑める。集団と集団が暴力を振るい合う、あるいは殺し合う、と考えれば、「戦争」という言葉が、素直に思いつくだろう。

問2　傍線部(b)の前後の文脈を押さえる（傍線部(b)を含む一文はやたらと指示語が多いので、しっかり把握しておかないと、苦しい）。

まず前の部分を整理すると、「『人間の攻撃性、暴力性、殺人について』、二つの指摘（＝強調）がなされたが、その指摘が大きな説得力を持ったことの裏にゆううつな情況があるように思える。」となる。つまり、指摘が大きな説得力を持っている情況、これを筆者は「憂鬱」といっているのである。ではその指摘とは何か。もちろん前にも書かれているが、傍線部の後に、より端的に述べられている。「それは、動物と人間の……問いかけられ……ことなのである」（10～12行目）の部分がそうである。さらにこれを言い換えて「つまり、人間が……絶望という形ではなく……すぎなかったのである。」（13～14行目）となっているので、こちらの方を解答には生かすべき。なお、ここの部分で押さえたい言葉は、「優越感」だ。つまり本来なら恥ずべき（＝本文では「人間に対する不信とか絶望」と表現されているが……）「残忍性」さえも、「人間は動物とは違うのさ」と思ってしまう、しかもその裏には「優越感」が見え隠れしている、この情況を指して筆者は「ゆううつ」と表現しているのである。

問3　まずは、選択肢に対する理解が必要だ。この三つの選択肢の中でそのままの形で本文にでてくるのは、(ア)の「同種他個体」だけ。あとは(イ)に似た言葉で「異種個体」というのがでてくるだけ。ここから、(ア)～(ウ)の概要を、おおまかにでかまわないからとらえる必要があろう。問題になるのは「種」をどういう括りで筆者が考えて使っているのかということだが、(ア)は「スローガンのための攻撃」を言い換えて「同種他個体に対する闘争行動」と言っているので、例えば人間だったら「人間」という括りが同じ、ぐらいの概念で捉えることができよう（生物学的に言えば「科」が同じというところか）。同様に(イ)は「肉食動物がえものをおそうような異種個体」とあることから、例えば「ライオンとしまうま」の関係を思えばいい。これらを押さえた上で、問題になっている傍線部を見る。

まずは①。これは二つ後の文の「しかし、限られた……では、多くの個体がごちゃごちゃといたら、それはその種にとってはおそらく致命的なことであろう」がヒントになる。ここでいうその種とはもちろん「特殊なえさを食っている魚」の「種」のことである。従って、同じ「魚」同士、他の個体という意味で(ア)が選べよう。

次に②であるが、これは「なわばり」や「順位」が、どういう個体の間でおこるのかを考えればよい。傍線部の後の文脈を辿っていけば「順位がない集団」→「無秩序」→「無秩序ではない」→「それなりの構造の『社会』を持っている」→「この社会……同種個体間」となるので、これも(ア)が選べる。

最後の③であるが、これは傍線部の前の「自分の巣の近辺に現れる他個体」＝「よそもの」であることから、「種」を問わず「他の個体」ということで、(ウ)が適当。

問4　傍線部(c)で「問題はもっと根本的なものである」と言っているので、この「問題」が何であるかを把握するのが第一段階だ。そこでこの傍線部を含む段落よりも一つ前を読んでみると、「各個体に攻撃性がなかったら、……」の部分がまず浮かんでくる。ここでは特に「問題」という言葉は使われていないが、「(もし)……なかったら」という仮定の上に話を進めているので、ここは問題提起の部分だと考えられる。つまり「攻撃性の有無」がここでいう問題なのである。この問題について「もっと根本的」といっているので、「攻撃性」に対する見解を述べている部分を探せばいいことが分かろう。しかも、「ぼくの定義に従えば」という言葉で、筆者の意見が述べられている所が簡単に判るので、探しやすい。「もし攻撃性がなくなったら……」以下がそうである。設問に三十五字以内の一文という条件があるので、「個体間……ことすらできない。」の一文であると断定できる。

問5　傍線部(d)の前に「その」とついていることから、これは「攻撃性」についての「いわゆる悪」の面であるということが摑める。ここで一つ考えてほしいのが、「いわゆる」という言葉だ。「いわゆる」とは「俗に言う、一般的に言う」という意味。ここから、「攻撃性」における「いわゆる悪」とは何か、と考えれば、純粋に「攻撃」であると捉えることができよう。つまりローレンツが指摘する攻撃性の不可欠さは認めた上で、なおかつ「攻撃性が攻撃性であるがゆえに持つ悪の側面」というのが、ここでいう「いわゆる悪」なのである。これは、冒頭の段落の人間の攻撃性の特殊さにつながることである。つまり冒頭で「動物では攻撃行動が儀式化されており、殺合いはおろか互いに傷つけ合うこともない、それにひきかえ人間は……」と述べているように、人間は必要以上の（種の保存に必要な以上に）攻撃をしてしまっているのである。これを上手く文中の言葉を使って十五字以内で表現すればよい。なお、設問に文中の言葉を使ってという条件がなければ、「必要以上の殺し合いをすること。〔15字〕」というような解答例も考えられよう。

問6　今回の単元で、メインの設問がこれだ。結局この文で何が書かれていたのかが摑めればよいわけだ。単純な方法として、文章の最初と最後をみてみると、「人間の攻撃性、暴力性……」で始まり、「この複雑さのゆえに、攻撃性の問題はトクにやっかいなもの

として人間の前に立ちはだかっているのである。」で終わっている。つまりこの文章は「（人間、あるいは人間を含めた動物の）攻撃性」について述べているのである。では「攻撃性」の何が問題にされているのかであるが、これは二つの段落に（第五段落とラストから三段落め）に述べられているローレンツの考え方、すなわち「攻撃性は種を維持するための不可欠なメカニズムの一つだ」ということであろう。後者のこの部分を使ってしまうと、二十五字以内で抜き出せないので、第五段落の方から抜き出すと、

《解答》のようになる。

●メモ●

9章

【問題】（演習）

出典…高橋昌男『夏草の匂い』／オリジナル問題

文章略解

焼け残り荒廃した学校に登校した康之は、母が「とつぜん何だか死んでもいいという気になった」と言ったことを思い出す。その感覚は、自分が焼け跡の雑草の繁みの中で感じた感覚と同じだろうかと考え続けていた。その日、伯母と諍いをして家を飛び出してきた母が学校に迎えに来ていた。諍いの理由を聞いても答えてくれない母と、父の墓参りを兼ねてピクニックをする。康之は余所行きを着て化粧までしている母が「何だか死んでもいい」という気になっているのではないかと不安になる。食後、母子はジャンケンで勝った方が石段を登るという遊戯を始める。康之は勝ち続け、母は父の墓の前にとどまり、母との距離が離れていく。康之には、まるでそれが母との永遠の別れを象徴するかのように感じられ、その不吉な思いを払いのけるように、母に勝って貫おうと必死になるのであった。

解答

問1　(1)＝むざん　(2)＝わずら　(3)＝ふんがい　(4)＝しょうろう　(5)＝かんせい

問2　全身をひたす無力感にどうにでもなれというなげやりな感覚。〔28字・解答例〕

問3　伯母との諍いの原因が自分でないと確信しながらそう訊くことで母から真相を聞き出す質問だったという意味。〔50字・解答例〕

問4　普段と異なる母の様子に死の不安がよぎるが、陽気な母に合わせて、自分の不安をうち消そうとしたから。〔48字・解答例〕

問5 父の墓前に留まる母と離れるのが永遠の別れを意味するようで、母がジャンケンに勝つことで生の世界に引き戻せると思ったから。〔59字・解答例〕

【問題】（自習）

出典…乃南アサ「姉と妹　福島・三春」〈3〉の全文（『行きつ戻りつ』所収）／聖心女子大学・02年

文章略解

夫婦の困難を助けてもらうため、決して弱みを見せたくなかった姉を初めて訪ねた主人公。かつて大企業の重役夫人であった姉は、突然田舎暮らしをしたいと言い出した夫とともに都会を離れ三春で暮らしていた。穏やかな笑顔に、都会の贅沢は捨てた代わりに快適な田舎暮らしを楽しんでいるかに見えた姉であったが、実は夫が突然言い出した田舎暮らしという選択をある種の諦観を持って受けいれているらしいことを、主人公は知ったのだった。

解答

問1　(1)＝(イ)　(2)＝(エ)　**問2**　(イ)

問3　都会から離～第二の人生〔14～15行目〕

問4　1＝影にいて支えてくれる存在。〔解答例・13字〕　2＝向きをかえて引き返すこと。〔解答例・13字〕

問5　いつでも自分を子ども扱いし、決して弱みを見せたくない相手である姉とは違い、母になら気兼ねなく自分たち夫婦の苦労を相談して頼りにできるのに、というせつない思い。〔79字・解答例〕

問6　(オ)

解説

問1　人物確認の設問。人物関係を「呼称」などの根拠に基づいて確認すればよい。この場面は、自分たち夫婦の困難（恐らくは会社経営上の経済的なもの）を助けて欲しくて、田舎暮しを始めた姉夫婦を主人公が初めて訪ね、事情を言い出せぬままに翌日姉の誘いでドライブに出掛けた車中である。

(1)の「一之さん」は、

> 「大したものねえ。あの(1)一之（かずゆき）さんが、今や社長さんで、あなたは社長夫人なんだもの」
> 「お姉ちゃんの方が、そうなると思ってた」

から、「あなた」が妹であり「社長夫人」である「彼女」、そして「一之さん」が「社長」であり「彼女の夫」だとわかる。

(2)の「あの人」は、

> 「私だって。まさか(2)あの人が、田舎で喫茶店をやりたいなんて言い出すとは思わなかったものね」
> ……「お義兄（に）さんがコーヒー淹（い）れるの？」「当たり前よ。今や立派なマスターなんだから」

から、「あの人」とは喫茶店の「今や立派なマスター」であり「田舎で喫茶店をやりたい」と言い出した、主人公にとっては「お義兄さん」である「姉の夫」だということになる。

問2　主人公の心情に関する設問。傍線部の前後を因果関係を確認しながら「時系列」で丁寧に整理してみると、

①伏線　＝主人公は、姉夫婦の選んだ田舎での第二の人生を贅沢で羨ましいものと思った。
　　←　ダカラ
②前　＝何気なく、喫茶店のマスターになったという義兄にヒゲが似合うと誉めた。
　　←　トコロガ
③直前　＝姉は「あの人の今の自慢っていったら、あれくらいのものよ」という思わぬ返答をした。
　　←　ダカラ
傍線部　＝「一瞬ひやりとして隣を見た」
　　←　ソノトキ
④同時　＝「…姉の身にも、やはり彼女の知らない何かが起こっていたのだろうか。そんなはずがない…」との疑念が湧く。
　　←　ダカラ
⑤直後　＝「姉の横顔を、改めて見つめた」
　　←
⑥後　＝安達太良の山並みを見て、ふと姉を『智恵子抄』の「智恵子」に重ね合わせ「夫である高村光太郎を支え続け、やがて心を病んだ女性。――夫を支えて、振り回されて」…と思った。

ということになる。つまり、直前の姉の意外な返答が主人公を「ひやりと」させたのだ。

(ア)は、後半の「ハンドルさばき…」云々（うんぬん）にまったく根拠がない。本文には姉の運転ぶりに不安を感じさせる表現は見当たらない。前半の「姉の返した言葉は何気ないもので」もおかしい。これでは「一瞬ひやりと」しないはずだ。

(イ)、「不仲をうかがわせるような」「突き放した返答」は少々迷うが、たしかに「あの人の今の自慢」が「あれ（＝ヒゲ）くらい

のものよ」という言い方は、裏返すと「今の夫にはヒゲ位しか自慢できるものがない」という、妹を「一瞬ひやりと」させる返答になっている。また「姉夫婦にも口に出せない困難があるのかという思い」も、「姉の身にも、やはり彼女の知らない何かが…だろうか」とある心中描写を受けていて妥当であり、これが正解。ここが後の『智恵子抄』の「智恵子」の生き方と姉の生き方とを重ね合わせ、「夫を支えて、振り回されて」との感慨を持つことの伏線とされている。

(ウ)は、前半の「『義兄』をおとしめるような発言」はよいとしても、「発言を…引き出してしまった」がおかしい。姉妹の何気ない会話の中でむしろ「義兄」を誉めているはずだ。また、妹の心情が「姉を傷つけたか否か」に限定されている点もまずい。「快適な生活」を送っているかに見えた姉夫婦の不和を疑う心情が「一瞬ひやりと」の内容であるはずだ。

(エ)は、唯一傍線部の心情の主体を「姉」にしてしまっている点で、まったく不適当。

(オ)は一見よさそうだが、「信じたくない気持ちで」が「そんなはずがない（＝信じられない）」とはずれている。また「横顔を改めて見つめた」が「一瞬…見た」とは異なる。「一瞬ひやりとして隣を見た」そのあとで、「そんなはずがないと思いながら、それでも彼女は、もう何年も会っていなかった姉の横顔を、改めて見つめた」はずである。

問3　抜き出しの設問。傍線部「ここでの快適な暮らし」とは姉夫婦の「三春」での田舎暮らしを指すはずなので、結末が傍線部の「…暮らし」に近い内容の「名詞句」になっている、41～45字ひとまとまりの箇所を目安に探していく。すると、14～15行目に「都会から離れて、環境の良い場所で、好きなことをして暮らせる、そんな贅沢な第二の人生があるものかと彼女は思う（53字）」があるので、条件に合うように切り取る。「都会から離れて、環境の良い場所で、好きなことをして暮らせる、そんな贅沢な第二の人生（41字）」と区切るのが、文字数も終り方も設問と合致する。「都会から離」～「第二の人生」が正解。

問4　慣用句の意味説明の設問。ここは「十五字以内」で端的に辞書的な説明をまとめればよい。その際、限定しすぎや広げすぎには注意したい。

1の「後ろ盾」は、文脈でも「何百人もの部下」とあることから察しが付く。「後ろ」「盾」という表現の語感を生かし「頼りになる」というプラス・イメージでまとめること。

2は、設問の指示に注意。「きびすを返しかけた」ではなく、終止形で「きびすを返す」の説明をする。「きびす」とは「踵」と

書き「かかと」のことである。「『やっぱり寒いわね。車に入ろう』…きびすを返しかけた姉に…」からも考えることができるが、やはり知識が必要。「くるりと向きを変えて元来た方向へ引き返すこと」を指す。なお「きびすを接して」というと「（事件などが）次々と続いて起こるさま」を指す。

問5　心情説明の設問。単に言葉の続きではなく「ああ、本当の母だったら、母が生きていてくれたら……」という言いさした表現の後に主人公の「思い」を補う点に注意。「もし…だったら、～できただろうに」という古文の「反実仮想」や英語の「仮定法」に近い表現の後半部分の補足である。設問の条件である「『母』と『姉』とを対比しながら」をまずまとめておく。「姉」に対する思いは心内描写の形で多く述べられているが、「母」への思いは直接的には述べてないので「対比」を利用して補足する。

「姉」との関係や思いについては、二箇所のまとまった表現がある。34～37行目に、

> 「姉は、彼女より六歳上だった。幼かった頃から、彼女が見てきた姉は、常に自分よりもずっと先を歩んでいる、きらめくような存在だった。一人っ子だった時期が長い上に病気がちだったせいか、我が儘（ままま）で甘えん坊なところがあったし、親の手を焼かせたのも姉の方だ。彼女はいつも、半ば置いてけぼりを食らった気分で、少し離れた場所から姉を見つめていた。どう足掻（あが）いても追いつけない、そう感じていた」

とあり、後の44～46行目に、

> 「本当は、姉になど頼りたくはないのだ。だから、自分たち夫婦が苦労している姿など知られたくなくて、一度も三春には来なかった。彼女には、常にそういう思いがあった。いつでも自分を子ども扱いしてきた姉に対して、決して弱みを見せたくない、一人前の女性として、立派に張り合っていきたいと、そう思ってきた」

とある。特に後の記述から、「頼りたくない」「苦労している姿など知られたくない」「いつでも自分を子ども扱いしてきた姉」「決

して弱みを見せたくない」「一人前の女性として、立派に張り合っていきたい」など、つまり妹として強烈な対抗心を抱いていると解釈できる。

一方「母」については、「姉」への思いの裏返しから補足して考える。主人公は止むに止まれず相談に来たはずなのに一泊してもまだ何も打ち明けられないでいる。順調そのものに見えた姉夫婦にも困難があるらしいと知るが、「思い切って『あのね』と声をかけた」ものの、結局「考えていたのとはまるで違う言葉（＝「お姉ちゃん、お母さんに似てきたわ」）しか出なかった」のである。したがって、「母だったら…」の後には、「頼りたい」「夫婦の苦労も素直に話せる」「一人前に扱ってくれる」「弱みも見せられる」「張り合わなくてよい」…などと姉に対してとは対照的な内容を補うことができる。

ここから、「…な姉とは違い、母になら、…のに、という思い。」の形式にまとめる。

問6 心情説明の設問。姉の「相変わらずの柔らかい微笑み」が「ある種の諦観（＝静かなあきらめの境地）」の表われだというのだが、姉から誰の何に対しての、どの程度の「諦観」なのかを、きちんと読み取って考える。

「相変わらずの」とある通り、場面の前半でも姉は穏やかに微笑している。しかし、夫の転身の選択について「それを、自分自身に納得させるために、すべてを変える必要があったのよ」と答えた直後では、「小さなため息をついた」とある（33行目）。「諦観」につながる表現としてこの「小さなため息」に注目する。さらに、安達太良山を見て主人公の脳裏に浮かんだ「夫である高村光太郎を支え続け、やがて心を病んだ女性。――夫を支えて、振り回されて…」という「智恵子」についての表現（42～43行目）も考えあわせる。

主人公が「初めて理解した」姉の「ある種の諦観」とは、「たとえ苦労が多くとも自分が選んだ夫の生き方を妻として受け入れていくしかない」という夫の生き方や夫婦の生き方に関わるものであるはずだ。それに触れているのは㋓と㋔の二つだが、㋓は「いずれは……心を病む」が根拠のない限定のしすぎであるし、第一「智恵子」の話は姉は知らない主人公の頭の中だけの思いであるはずだ。一方㋔は、「生活の転換」「夫が選択」「受け入れていこう」という、傍線部に適合する「諦観」となっていて、本文全体のテーマとも通じているのでこれが正解。

10章

【問題】（演習）

出典…『徒然草』　／　オリジナル問題

現代語訳

丹波の国に出雲というところがある。出雲大社の神を勧請して、立派に造営している。志田のなにがしとかいう人が領有しているところなので、秋の頃、その志田のなにがしが、聖海上人やその他にも、人を多く誘って、「さあいらっしゃい、出雲大社を参拝に。ぼた餅をごちそうしましょう。」と言って、連れて行ったところ、各自拝んで、とても深く信心を持った。神前の獅子と狛犬が、背を向けて、後ろ向きに立っていたので、上人はとても感動して、「ああ、すばらしいなあ。この獅子の立ち方は、とても珍しい。深い由緒があるんだろう。」と涙ぐんで、「どうですか皆さん、このすばらしいことがなぜお目に止まらないのですか。情けない。」と言うので、それぞれ不思議がって、「本当に他とは違うなあ。」「都での土産話として語ろう」などというので、上人はさらに（その由緒を）知りたがって、年配でものを知っているに違いない顔をしている神官を呼んで、「この神社の獅子のお立てになり方は、きっと由緒のあることでございましょう。少々お伺いしたい」とおっしゃったところ、「そのことでございます。いたずらな子供たちの致したことで、けしからぬことです。」と言って、（獅子・狛犬に）近寄って、置き直して去って行ったので、上人の感涙は無駄になってしまった。

解答

問1　深い由緒（理由）があるのだろう

問2　（普通は向かい合っているものなのに、）背を向けて、後ろ向きに立っていた。

問3 神前の獅子・狛犬の背を向けた置き方に、深い由緒を感じ、胸をつまらせ涙ぐんだのに、それは単なる子供たちのいたずらだったから。

問4

	品詞	活用の種類	活用形
ⓐ	動詞	ラ行四段活用	已然形（命令形）
ⓑ	形容詞	シク活用	連用形
ⓒ	形容動詞	ナリ活用	終止形
ⓓ	動詞	ラ行四段活用	未然形
ⓔ	動詞	ラ行変格活用	連体形
ⓕ	形容詞	ク活用	連体形
ⓖ	動詞	ワ行下二段活用	連用形

【問題】（自習）

出典…『徒然草』第一二段　／　オリジナル問題

現代語訳

自分と同じ気持ちであるような〔＝気心のあった〕人としんみりとあれこれ語り合って、興味のあることも、世間のとりとめのない事も（どんな話題でも）、心の隔てなく〔＝隠すことなく〕言って気分を晴らすようなことは嬉しいに違いないのに、（実際は）そういう人がいるはずもないので、（気心の合わない人とも）全く食い違わないようにしようと思って〔＝何とか話を合わせようと思って〕、対座しているようなことは、ひとりでいるような気持ちがしないだろうか（、いや、孤独な気持ちになる）。

お互いに言うような〔＝お互いに意見が一致するような〕事は、「本当に（そのとおり）」と聞く価値はあるけれども、わずかに（意見の）食い違う点もあるような人〔＝若干は意見の異なる人〕が、「私はそう思うか（、いやそうは思わない）」などと反対して言い張り、「こうだから、こうだ〔＝こういう点から、このように思うのだ〕」と（筋を通して）話し合うのなら、（それはそれとして）退屈さも晴れるだろうと思うのだが、本当に、少しの不平をいう方面も自分と同じではないような人は、大体のつまらぬ事を言うような程度ではあるだろうが〔＝不平についての話までも、自分と合わなければ、当り障りのない話しか言いようがなく、本当に心を明かすこともできないだろうが〕、（そういうのは）誠実な心の友とは、程遠いところがあるはずに違いないのが、（本当に心を打ち明けられる友というには、まったく遠い存在といえようから）さびしくつまらないのだ。

解答

問1　①＝(イ)　②＝(ウ)　③＝(イ)　④＝(ウ)

問2　しめやかに（ナリ活用・連用形）／物語し（サ行変格活用・連用形）／て、

問3　(イ)

解説

問1　①の「をかし」は頻出する重要古語の一つである。興趣・賞美を表すのが第一義で、自分を傍観的位置において対象を面白いと見、興味を覚える、というのが、この言葉の表す意識である。(ア)の「愉快」や(エ)の「楽しい」は、主観や感情に傾いた言葉であるので、「をかし」の持つ、客観的な性格とは少々ずれる。

②の終止形は「うらなし」。「うらなし」の「うら」は、「うらやまし」「うらがなし」などの「うら」と同じで、「心」を表す語である。従って、心の隠すことがないのが「うらなし」なのである。思慮が足りない意味で用いる時もあるが、ここでは腹を割って、腹蔵なく、の意味で考えればよい。

③「まじけれ」は打消推量の助動詞「まじ」の已然形。「……ナイダロウ、マイ」という意味。これに接続助詞「ば」がついて、確定条件（カラ・ノデ）を表している。

④について。「まめやか」は「真実の、誠実な」の意味。「実用向きな」の意味に用いられることもあるが、文脈上（「友」に係っていることから）、選択肢でいうと(ウ)が適当であろう。

問2　ここでのポイントは「物語し」の部分をどう考えるかだ。「物語す」が終止形の複合サ変動詞と解釈するのが一般的であろうが、「物語」（名詞）＋「す」（サ変動詞）ととることも可能（解答例では、複合サ変動詞でとった）。どちらも「物語をする」という意味。「物語」は、「物語る」が転じて名詞になったもの。「物語る」の「物」は接頭語で、「具体的事物」を表す（抽象的事物は「事」で表す）。つまり、「物語る」は、「何か具体的なことを相手と意志を通わせながら話す」の意である。だからこの場合は、単に話をするぐらいの意味と考えればいいだろう。「しめやかに」は「しめやかなり」が終止形。したがって、活用の種類は「ナリ活用」となる。

問3　「わびし」は「侘ぶ」からきた形容詞。「侘ぶ」は、「思いのままにならぬことを嘆く」意を表す動詞で、「落胆・悲観・困惑」などを表す。本文で述べられていることは、〝真実の心の真に語り合える友はめったにいない（＝2行目「さる人あるまじければ」）〟という嘆きであり、だから〝人との付き合いはいつも相手に気を遣い（＝2行目「つゆ違はざらんと向ひゐたらん」）〟、おざなりな会話しか成立しない、それがわびしいと言っているのである。これは、〝一人でいるのと変わりはあるまい（＝「ひとりある心

地やせん」）〃という寂しさや物足りなさの表明である。したがって正解は㈠。

L1J/L1
高１東大国語
高１東大・京大国語

Z-KAI

会員番号	

氏　名	

不許複製